日本福祉大学社会福祉学部・日本福祉大学福祉社会開発研究所
『日本福祉大学社会福祉論集』第 105 号　2001 年 8 月

障害者に対するスポーツ・レクリエーションの普及に関する研究

藤　田　紀　昭

1. はじめに

長野パラリンピックの成功，シドニーパラリンピックの報道体制などを見る限り，今日，障害者スポーツは多くの人々の注目を集めている．実際，競技成績や競技パフォーマンスの向上など障害者スポーツの発展には目ざましいものがある．しかし，その一方でより重度の障害を持つ人々のスポーツ参加が阻害されていたり[1)]，障害者スポーツセンター利用者の固定化，高齢化が進み，新規利用者の獲得が進まないという問題点がある[2)]．

パラリンピックに出場する選手の多くは自立的に生活し，移動も多くの場合，独力で可能である．したがって，各種のスポーツ参加やスポーツ施設までの移動等も比較的容易に行なえる．ところが，障害者療護施設などに入所している人の場合，障害が重く，独力での移動が困難であったり，参加可能な運動・スポーツの種目がなかったり，また，施設職員に運動やスポーツを指導できる人が少なく，そうしたプログラムに参加する機会も非常に限られているのが実情である．

このように，障害者のスポーツ・レクリエーション参加を阻害している要因の一つとして指導者不足が指摘されている[3)]．体育・スポーツ関係者には障害のことを理解してスポーツ指導のできる者が少なく，福祉関係者には運動やスポーツの知識や指導方法を身につけている者が少ないためだ[4)]．施設入所者，あるいは通所者，重度障害のある人，障害者スポーツセンター等から遠距離の地に住む障害のある人は，いわば最も運動やスポーツに触れる可能性が低い人達といえよう．

そこで本研究ではこれらの点を踏まえ，施設利用者にスポーツ・レクリエーションプログラムを提供し，その効果を明らかにするとともに，施設職員に対してスポーツ・レクリエーションの知識を普及することが大きな柱となっている．

したがって本研究の目的は

① 継続的スポーツ・レクリエーションプログラムの実施が障害者の意識，態度，および QOL に与える影響を明らかにすること．

② 施設利用者および職員に対して，スポーツ，レクリエーション，健康に関する知識を提供

ざし，プログラム終了後も継続的にスポーツ･レクリエーションを実施できるようにするための方法を明らかにすること

である．

本研究では施設利用者に対して運動プログラムを提供すると同時に，施設職員に対しては指導方法や関連知識を提供する．したがって，このプログラム終了後には施設職員に運動，レクリエーション，スポーツ指導のノウハウが蓄積されることになり，調査終了後も継続的な運動プログラムの実施が期待でき，障害者の運動，レクリエーション，スポーツの生活化に貢献することができる．この点が本研究の特色の一つである．

また，本研究で得られた結果（障害者施設における適切な運動指導方法，情報提供の方法，指導者の養成，プログラム内容）は全国の他の施設おいても，それぞれの施設のおかれた状況，障害者の実態を勘案しつつ汎用することが可能となり，障害者スポーツの普及に貢献できるものと考えられる．

2. 研究の方法

1）調査対象施設の特徴

調査対象となったのは愛知県内の「M」という身体障害者通所授産施設（社会就労センター）である．運営主体は社会福祉法人（1997 年 7 月 3 日認可），施設の事業は翌 1998 年 7 月 1 日から開始された比較的新しい施設である．利用定員は 30 人，職員定数は 9 名である．

本プログラム提供事業開始時の利用者の実数は 32 名，職員数はパートを含め 12 人であった．利用者には身体障害者のほかに知的障害のある人，自閉症の人などが含まれており，重度の障害を持つ人が多いのが特徴である．利用者の詳しい情況に関しては次で述べる．

施設の運営方針の中に「……重い障害を持つ人にはできない作業をするよりも体を動かして楽しく毎日を送れるような場にしていきます.……」とあり，今回のプログラムはその一環として受け入れられた．

施設での 1 日は午前 9 時からの朝礼に引き続き作業が始まり，昼食，昼休憩をはさんで作業，清掃，終礼があり，午後 4 時に利用者は退所する．本プログラムは午後の作業時間の一部を利用して行なわれた．

ここでの作業科目は印刷（オンディマンド　プリンティングシステム），情報処理（パソコンによる文書，データの作成・管理・処理），下請け軽作業（電気，衛生陶器，プラスティック部分加工等），木工（自主製品），陶芸（自主製品），織り・縫製（自主製品）である．

2）調査対象者の特徴

この施設には男性 20 名，女性 12 名，計 32 名の利用者がいる．年齢は，18 歳から 59 歳までで，平均年齢は 33.2 歳（SD12.6）と比較的若い．障害別では身体障害のある人が 19 名，知的障

害のある人が 7 名，身体及び知的障害の重複障害の人が 6 名である．身体に障害のある人の障害等級は 1 級が 9 名，2 級が 12 名，3 級が 3 名，4 級が 1 名で，重度障害者の割合が多い．

事前調査に回答してくれた施設職員は男性 5 名，女性 3 名の計 8 名，平均年齢は 36.6 歳であった．

さて，このうち今回のスポーツ・レクリエーションプログラム提供事業に参加した利用者は男性 15 名，女性 9 名，計 24 名，平均年齢 29.3 歳（SD11）であった．プログラムへの参加は希望

表 1．スポーツ・レクリエーションプログラム参加者の属性一覧

氏名	性別	年齢	身体障害	知的障害	障害内容	障害程度	移動手段	出席回数	備考
A	男	25	○	×	体幹機能障害	重度	自立歩行	22	
B	男	47	○	×	左上下肢機能障害	重度	自立歩行	20	
C	男	48	○	×	四肢体幹機能障害	重度	電動車いす	8	ボッチャのみ参加
D	男	55	○	×	右上下肢機能障害	重度	杖歩行	21	
E	女	37	○	×	四肢体幹機能障害	重度	車いす全面介助	17	
F	男	25	○	×	四肢体幹機能障害	重度	電動車いす	12	
G	女	30	○	×	体幹機能障害	重度	車いす	12	
H	女	29	○	×	四肢体幹機能障害	重度	車いす	11	
I	女	19	○	×	上肢体幹機能障害	重度	車いす	22	
J	男	33	○	×	四肢体幹機能障害	重度	自立歩行	18	
K	男	20	×	○	自閉症	重度	自立歩行	10	
L	女	25	×	○	自閉症	重度	自立歩行	13	
M	女	19	×	○		重度	自立歩行	18	
N	男	19	×	○		重度	自立歩行	13	
O	男	23	×	○	自閉症	重度	自立歩行	20	
P	男	26	×	○		重度	自立歩行	21	
Q	男	21	×	○		重度	自立歩行	21	
R	女	35	○	○	体幹機能障害	重度	車いす	18	
S	男	18	○	○	視覚障害	重度	自立歩行	18	
T	女	26	○	○	四肢体幹機能障害	重度	介助付き歩行	20	
U	女	26	○	○	四肢機能障害	重度	自立歩行	20	
V	男	28	○	○	体幹機能障害	重度	自立歩行	21	
W	男	18	○	○	体幹機能障害	中度	自立歩行	22	
X	男	51	○	○	上下肢部分欠損	重度	自立歩行	21	

する人の自主参加を基本としたが，意思表示のできない人の中に，職員の配置等の関係から，このプログラムに参加せざるを得ない人もあったことを付しておく．なお，参加者の属性の一覧は表 1 の通りである．

3）研究調査の経過

先述の目的を達成するために本研究では以下のような方法で研究調査を進めた．

愛知県内の障害者施設 1 箇所を調査対象施設として選定した．選定にあたっては職員の協力体制，立地場所，利用者の人数，職員に障害者スポーツ・レクリエーションの専門的知識を持つ者が少ないことが考慮された．

施設に調査の趣旨を説明し，理解を得た後，施設利用者の障害状況，場所，ボランティア等人的条件を勘案し，プログラムで提供する種目選択がなされた．具体的には，ボッチャとダンスである．ボッチャとは一種のターゲットゲームで，重度の肢体不自由者でも参加することが可能な点に特徴がある．ダンスも各障害に合わせて楽しむことが可能であることから選定された．

プログラム提供に先立ち，施設利用者及び，施設職員に対して事前調査を行なった．施設利用者に対するアンケートでは，知的障害のない人に対しては過去のスポーツや運動経験，スポーツや運動に対する意識（態度），身体的側面，心理的側面，社会的側面に関する質問がなされ，利用者はそれぞれ 5 段階評価にて回答した．知的障害のある人に対しては現在の健康状況等を職員が記入するかたちで回答が行なわれた．また，施設職員に対するアンケートではこれまでのスポーツ・運動・レクリエーションの指導経験，知識に関する質問，スポーツや運動が施設のプログラムとして根付くことの条件等が質問された．

2000 年 5 月から 12 月までの 8 ヶ月間，1 ヶ月に 3 回，合計 22 回スポーツ・レクリエーションプログラムが提供された．プログラムは月曜日の午後 13 時 30 分から 15 時までの 1 時間 30 分．場所は施設内食堂（ダンス），日本福祉大学体育館（ボッチャ），施設近くの小学校体育館（ダンス，夏休み期間中のみ）が利用された．

各回のプログラムは各種目専門の指導者（ダンス指導者 2 名，ボッチャ指導者 1 名）によって提供された．これに施設職員数名，学生ボランティア，地域ボランティアグループなどが加わるかたちでプログラムが展開された．

プログラム参加者はこのプログラムに関心のある希望者及び，自己の意志表示の難しい重度障害者数名で毎回十数名から二十数名であった．

プログラムの予定提供回数の半分を終わったところで，指導者，施設職員，ボランティア参加者等の間で中間総括が持たれ，後半プログラムの展開について話し合った．

そして，12 月，全プログラム終了後に，知的障害のない人には事前調査と対応する形で事後調査が行なわれた．知的障害のある人に対してはプログラム前後の違いについて職員が記入するかたちで事後調査が行なわれた．また，プログラム終了後 3 ヶ月ほど経過してから補充の調査が施設にて行なわれた．

表 2．研究調査経過及びプログラム内容

日　付	内　　容
2000. 3. 1	調査対象施設を決定.
2000. 4. 7	施設へ派遣するダンス・スポーツプログラム指導者とのミーティング
2000. 4.17	プログラムの内容，プログラム提供の方法，場所，日程等を打ち合わせる.
2000. 4.21	事前調査質問項目の検討・確認
2000. 5. 9	事前調査を施設に依頼
2000. 5.15	事前調査　第 1 回プログラム提供　軽運動　ボランティアミーティング 内容：音楽に合わせて上半身を中心とした軽運動
2000. 5.22	第 2 回プログラム提供　ダンス 仲良くなろう（ボランティアと利用者が組になり互いに知り合うためのレクリエーションダンス）. みんなで体を動かそう.
2000. 5.29	第 3 回プログラム提供　ダンス みんなで体を動かそう.2 人一組でリズムダンス
2000. 6.12	第 4 回プログラム提供　ダンス 二人一組でダンス．風船などを利用して
2000. 6.19	第 5 回プログラム提供　ボッチャ ゲームの説明，投げ方の説明，体験ボッチャ
2000. 6.26	第 6 回プログラム提供　ダンス 二人一組でダンス．風船を使ったゆっくりとした動きのダンス．みんなで円になって
2000. 7.10	第 7 回プログラム提供　ボッチャ 距離感をつかもう．ボッチャでボーリング，ゲーム
2000. 7.17	第 8 回プログラム提供　ダンス みんなで円になってレクリエーションダンス．フラフープを使ったストレッチダンス
2000. 7.24	第 9 回プログラム提供　ダンス コンパルソリーステップからフリーステップへ 指導者・ボランティアミーティング（中間総括）
2000. 7.31	第 10 回プログラム提供　ボッチャ　ボランティアミーティング（中間総括） 方向感覚を養おう．ボッチャでゲートボール，ゲーム
2000. 8. 3	第 11 回プログラム提供　ダンス 3 人一組でジャイブ的ダンス（ややスローで）
2000. 8.25	派遣指導者およびメビウス職員とのプログラムの中間総括および懇談会
2000. 8.28	第 12 回プログラム提供　ダンス 大きく動こう．布の利用．パラパラ.
2000. 9. 4	第 13 回プログラム提供　ボッチャ ゲームを楽しもう．グループごとにゲーム
2000. 9.11	第 14 回プログラム提供　ダンス フラフープを使った柔軟体操．二人組みでパラパラ．みんなで円になってダンス
2000. 9.18	第 15 回プログラム提供　ダンス 施設職員と共同指導．リズムダンス．慎吾ママ・パラパラ
2000.10. 2	施設代休のためプログラム提供中止
2000.10.16	第 16 回プログラム提供　ダンス みんなで円になってウォーミングアップダンス．慎吾ママを踊ろう．フラフープでストレッチ
2000.10.23	第 17 回プログラム提供　ダンス 施設職員と共同指導．手と上半身を中心とした動きのダンス
2000.11.13	第 18 回プログラム提供　ボッチャ ゲームを楽しもう．作業グループ対抗ゲーム
2000.11.20	第 19 回プログラム提供　ダンス 二人一組でダンス．慎吾ママを踊ろう 施設職員によるダンス指導（ジェンカ）
2000.11.27	第 20 回プログラム提供　ダンスみんながリーダー．座ってできるレクリエーション.
2000.12. 4	第 21 回プログラム提供　ボッチャ（施設職員による指導） ゲームを楽しもう.
2000.12.11	第 22 回プログラム提供　ダンス（施設職員による指導） 簡単な振り付けのフォークダンス相手を変えながら
2000.12.18	事後調査
2001. 3.19	事後補充調査

4）事前・事後調査における質問項目

身体障害のみある利用者に対する事前・事後調査の質問項目は次の通りである．(a は事前調査項目，b は事後調査項目．質問番号 11 から 29 は 5 段階評価による回答項目．また，質問番号 12〜15 は運動やスポーツに対する意識を，16〜19 は身体的側面，20〜23 は心理的側面，24〜27 は社会的側面を自己評価する項目となっている．28〜32 は今回のプログラムを評価する項目である．

知的障害を伴っている利用者に対する質問項目は 1〜10，及び事前調査項目として「現在の様子」事後調査項目として「プログラムを通じて良くなったこと」「プログラムを通じて変わらないこと，悪くなったこと」「その他の気づいた点」をあげ，いずれも施設職員が記入した．

1．氏名（a)
2．生年月日（a)
3．障害内容（a)
4．障害程度（a)
5．移動方法及びコミュニケーション方法（a)
6．禁忌事項（a)
7．特徴的な癖や習慣（a)
8．好きな人，苦手な人（a)
9．健康状態（a)
10．身体機能の状態（a)
11．(問 1−過去の運動経験 5 段階評価）障害発生後これまでに運動やスポーツを楽しむ機会はたくさんあった（a/b)
12．(問 2−5 段階評価：運動・スポーツに対する意識）私は運動やスポーツをすることが可能である（a/b)
13．(問 3−5 段階評価：運動・スポーツに対する意識）運動やスポーツなど体を動かすことは楽しい（a/b)
14．(問 4−5 段階評価：運動・スポーツに対する意識）運動やスポーツは好きなほうだ（a/b)
15．(問 5−5 段階評価：運動・スポーツに対する意識）運動やスポーツは得意な方だ（a/b)
16．(問 6−5 段階評価：身体的側面）食事はおいしく食べられる（a/b)
17．(問 7−5 段階評価：身体的側面）夜はよく眠れる方だ（a/b)
18．(問 8−5 段階評価：身体的側面）健康状態は良い方である（a/b)
19．(問 9−5 段階評価：身体的側面）日常生活の中で体を動かすことは苦ではない（a/b)
20．(問 10−5 段階評価：心理的側面）毎日ストレスはそれほど感じない（a/b)
21．(問 11−5 段階評価：心理的側面）いろいろな活動に積極的に取り組む方だ（a/b)
22．(問 12−5 段階評価：心理的側面）毎日の生活にはりがあると思う（a/b)
23．(問 13−5 段階評価：心理的側面）いろいろな活動に自信を持って取り組める方だ（a/b)

24．(問 14－5 段階評価：社会的側面）スポーツやレクリエーション大会などあれば参加してみたい（a/b)
25．(問 15－5 段階評価：社会的側面）施設外での活動にも参加してみたい（a/b)
26．(問 16－5 段階評価：社会的側面）人との交流は楽しいと思う（a/b)
27．(問 17－5 段階評価：社会的側面）人との交流は得意な方だ（a/b)
28．(問 18－5 段階評価：総合的評価）今回のプログラムに参加してよかった（b)
29．(問 19－5 段階評価：総合的評価）今後も何か運動やレクリエーションを続けてみたい（b)
30．(記述）今回のスポーツ・レクリエーションプログラムを受けて良かったこと（b)
31．(記述）今回のスポーツ・レクリエーションプログラムを受けて良くなかったこと（b)
32．(記述）その他（b)

3．結果および考察 1－継続的スポーツ・レクリエーションプログラムの実施が障害者の意識，態度，および QOL に与える影響に関して

事前事後調査の結果をここでは身体障害のみある人の場合，知的障害のある人の場合に分けて報告する．

1）身体障害のみある人に関して

身体障害のみある人 10 名の事前・事後調査の結果は表 3 および表 4 に示す通りである．

① 運動やスポーツに関する意識・態度

ここでは運動に対する志向性，態度を 4 つの質問によって調査した．「自分には運動が可能である」「運動は楽しい」「運動は得意である」の 3 つの点で自己評価が上がっており，全体でも 0.4 ポイント上昇している．「運動が好き」に関しては 0.1 ポイント下がっているもののほぼ横ばいといえる．本プログラムが運動に対する志向性，親和性，運動面での自己の可能性に対して好影響を与えているといえる．

事例 E は重度の脳性麻痺でこれまで運動らしいことをほとんどしてこなかったが，今回のプログラムを通じて「自分にもスポーツができることがわかり楽しめた」ことを高く評価していた．また事例 I も「意外と自分がやれるとわかって嬉しかった」と運動面での自己の可能性の発見を評価している．

「ダンスが楽しかった」(事例 B および F)「体を動かせてよかった」(事例 J）と運動できたことそれ自体を評価する意見もあった．

② 身体面に関して

運動面での評価が上がっている一方で，身体面の評価は下がる結果となった．「食事が美味しい」「よく眠れる」の二つの項目に関してはやや下がっているもののほぼ横ばいといえる．しか

表 3．各個人別の事前（上欄）および事後（下欄）調査の結果

氏名	問1	問2	問3	問4	問5	運動	問6	問7	問8	問9	身体	問10	問11	問12	問13	心理	問14	問15	問16	問17	社会
A	3	2	3	5	2	12	5	1	5	5	16	1	4	5	1	11	4	4	5	4	17
B	1	3	1	1	1	6	5	5	4	5	19	3	2	3	2	10	2	2	2	3	9
C	1	1	5	5	3	14	5	5	5	3	18	5	5	5	3	18	5	5	3	3	16
D	3	4	5	4	1	14	5	5	5	4	19	5	1	2	2	10	1	1	4	2	8
E	1	3	5	5	2	15	5	5	5	2	17	5	5	5	5	20	5	5	5	5	20
F	3	5	5	5	2	17	5	5	5	5	20	5	3	5	3	16	5	4	5	5	19
G	2	2	1	3	2	8	4	4	1	2	11	4	2	2	2	10	2	2	5	4	13
H	1	1	1	1	1	4	5	2	5	1	13	5	1	3	3	12	1	1	1	1	4
I	5	5	5	5	5	20	5	3	5	5	18	4	4	5	5	18	4	5	5	4	18
J	3	5	5	5	2	17	5	5	5	5	20	5	3	5	3	16	5	3	5	3	16
合計	23	31	36	39	21	127	49	40	45	37	171	42	30	40	29	141	34	32	40	34	140
平均	2.30	3.10	3.60	3.90	2.10	3.18	4.90	4.00	4.50	3.70	4.28	4.20	3.00	4.00	2.90	3.53	3.40	3.20	4.00	3.40	3.50
SD	1.27	1.51	1.80	1.58	1.14	4.92	0.30	1.41	1.20	1.49	2.84	1.25	1.41	1.26	1.22	3.70	1.62	1.54	1.41	1.20	5.06

氏名	問1	問2	問3	問4	問5	運動	問6	問7	問8	問9	身体	問10	問11	問12	問13	心理	問14	問15	問16	問17	社会	問18	問19	運動	身体	心理	社会
A	3	4	5	3	3	15	5	5	5	5	20	3	3	5	5	16	5	5	5	4	19	5	4	3	4	5	2
B	4	3	3	4	5	15	4	3	4	3	14	4	4	4	1	13	3	3	3	4	13	5	4	9	-5	3	4
C	1	3	4	5	4	16	5	5	5	1	16	5	2	5	2	14	4	4	5	3	16	4	4	2	-2	-4	0
D	2	4	4	4	4	16	4	5	5	5	19	2	4	4	4	14	4	4	4	4	16	4	4	2	0	4	8
E	2	5	5	5	3	18	5	5	5	5	20	5	5	5	5	20	5	5	5	5	20	5	5	3	3	0	0
F	4	3	4	3	3	13	5	4	2	2	13	4	3	3	3	13	4	4	5	4	17	5	4	-4	-7	-3	-2
G	3	3	4	3	3	13	5	2	2	3	12	3	3	2	2	10	3	3	4	3	13	3	3	5	1	0	0
H	1	2	1	1	1	5	5	5	3	1	14	2	2	4	1	9	2	2	3	2	9	1	1	1	1	-3	5
I	4	5	5	5	5	20	5	4	5	4	18	4	3	5	4	16	4	4	4	4	16	4	4	0	0	-2	-2
J	4	3	3	5	3	14	5	4	4	4	17	3	4	5	4	16	4	4	5	5	18	4	4	-3	-3	0	2
合計	28	35	38	38	34	145	48	42	40	33	163	35	33	42	31	141	38	38	43	38	157	40	37	18	-8	0	17
平均	2.80	3.50	3.80	3.80	3.40	3.63	4.80	4.20	4.00	3.30	4.08	3.50	3.30	4.20	3.10	3.53	3.80	3.80	4.30	3.80	3.93	4.00	3.70	1.80	-0.80	0.00	1.70
SD	1.17	0.92	1.17	1.25	1.11	3.77	0.40	0.98	1.18	1.49	2.79	1.02	0.90	0.98	1.45	3.01	0.87	0.87	0.78	0.87	3.10	1.18	1.00				

表 4．身体障害のみある人の意識調査結果

	プログラム前	プログラム終了後	差
過去の運動経験	2.3	2.8	0.5
運動が可能	3.1	3.5	0.4
運動は楽しい	3.6	3.8	0.2
運動が好き	3.9	3.8	-0.1
運動が得意	2.1	3.4	1.3
運動面合計	3.2	3.6	0.4
食事が美味しい	4.9	4.8	-0.1
よく眠れる	4.0	4.2	0.2
健康である	4.5	4.0	-0.5
体を動かすこと苦でない	3.7	3.3	-0.4
身体面合計	4.3	4.1	-0.2
ストレスない	4.2	3.5	-0.7
積極性	3.0	3.3	0.3
毎日にはりある	4.0	4.2	0.2
自　信	2.9	3.1	0.2
心理面合計	3.5	3.5	0
イベント参加希望	3.4	3.8	0.4
施設外活動希望	3.2	3.8	0.6
交流楽しい	4.0	4.3	0.3
交流得意	3.4	3.8	0.4
社会面合計	3.5	3.9	0.4

しながら，「自分が健康であると感じる」と「体を動かすことは苦ではない」の二つの項目ではそれぞれ 0.5 ポイントと 0.4 ポイント下がっており，身体面全体でも 0.2 ポイント下がっている．

プログラム期間中にケガをしたり（プログラム以外の場で），体調を崩した人がいたことがその原因と考えられる．また，事例 F，J の二人の場合，これまで運動やスポーツの経験少なく，自分にはなんでもできるという認識がプログラム前にはあったものの，実際にプログラムに参加してみると，自分にできないこと，うまくいかないことがあったり，意外と疲れやすいことを知り，身体面での評価が低くなったということが，事後補充調査で明らかになった．

③　心理的側面に関して

心理的側面に関しては「毎日ストレスがないほうだ」の項目が 0.7 ポイント下がっているほかは「積極性」「毎日にはりがある」「自信を持って物事に取り組める」のいずれもプログラム終了後ポイントを上げている．全体としてはほぼ横ばいといえる．ストレスに関する項目の点数が下がっている原因の一つとして，事後調査の時期が年末に重なり，印刷等施設での仕事が多忙であったことが考えられる．

「初めてのことがいっぱいあり，新鮮だった」(事例 I),「毎日の生活に変化を与えてくれる」(事例 G) とプログラム参加を評価する意見がある一方で「気が乗らないのにやらなきゃいけないことがあった」とプログラム参加に対する心理的負担を指摘する人もあった．

④　社会的側面に関して

「スポーツやレクリエーションのイベントに参加してみたい」「施設外での活動にも参加してみたい」「人と交流することは楽しい」「人と交流することは得意である」の 4 つの項目のいずれもプログラム終了後ポイントを上げており，全体でも 3.5 ポイントから 3.9 ポイントと 0.4 ポイントの上昇となっている．

「ボランティアなど施設外の人との交流が大変楽しかった」(事例 A),「ボッチャを通じ若年層の人達と触れ合う機会があってよかった」(事例 C),「施設外の人と知り合えた」(事例 E),「いろいろな人に会えた」(事例 I),「いろいろな人と交流できた」(事例 J) などプログラムの持つ社会的側面に対する好影響を指摘する人が多かった．

⑤　全般的にみて

身体障害のみある人の場合，今回のプログラムによって，運動に対する志向性，自己の社会的側面に特に好影響があったといえる．しかしながら，身体的側面に関しては自己の身体認識が低かったこと，プログラム期間中の体調不良などが影響して評価は低かった．また今回のプログラムのみで，身体面に対する好影響を図ろうとすることには無理があり，やはり継続的な運動等が重要であるといえる．

2) 知的障害のある人に関して

①　事例 L

プログラムへの積極的な参加はなかったが，ダンスのときに使った風船に関心を持ち，風船を使った遊びが好きになった．

②　事例 M

ダンスのように音楽に合わせて体を動かすことの面白さ，楽しさを知った．ボッチャに関してもボールを投げて近づけるという簡単なルールを覚えることができ一定程度楽しめた．

③　事例 P

母子関係が非常に強く，母親意外の人と付き合うことに不安を感じていた．また，表情は常に硬く変化がなかった．かといって，施設職員の手を煩わせるということもないため，施設職員と P との関わり合いの時間はこれまで少なかった．

プログラムを通じて，音楽による働きかけ，ダンスによる働きかけ，ボランティアの働きかけが継続的に行なわれたことから，表情に変化が見られ，明るくなり，笑ったり，声を出したりする機会が特に増えた．ダンスすること楽しんでいるようであった．

④　事例 Q

ダンスはステップを数えるなどが苦手で，あまり上手にはならなかった．人とかかわりあう中

で踊ること自体は楽しかった．ボッチャはだんだんとうまくなり，ゲームで勝つこともあり，自信となった，ボッチャのある日を楽しみにしていた．

⑤　事例 R

ダンス，ボッチャとも楽しく取り組めた．特に風船を使ったダンスプログラムでは障害を持つ前にやっていたバレーボールと重なるのか非常に楽しそうであった．今回のプログラムに参加してよかったと感じており，今後も様々な活動に参加したいと思っている．

⑥　事例 S

ダンスが楽しく，多くの人とかかわり合い，話しができたことが楽しかった．視覚障害があるため，説明などでわかりにくいところがあった．

⑦　事例 T

積極的，自発的参加は難しかった．しかしながら，指導者やボランティアとのかかわりの中で，表情が和らぐことがあった．また単調な毎日に変化が与えられる良い機会となった．

⑧　事例 X

もともと踊ることが好きだったが，ダンスがますます好きになった．

⑨　事例 W

身体的状況から速い動きでダンスをすることが困難であり，ダンスは難しいと感じた．ボッチャはだんだんとボールがうまくコントロールできるようになり上手になることがわかり楽しかった．

⑩　事例 K，N，O，U，V

重度の知的発達障害があり，プログラムの場にいるが，積極的にかかわることができなかった．プログラムの前後で特段の変化も見られなかった．

⑪　全般的にみて

身体障害のある人と同じ場でのプログラム進行であったため，参加すること自体に困難が見られる場合が多かった．当初の予定では両者を分けて行なう予定だったが，施設側からの希望もあり，同時展開となった．個々の状況に合わせて同じボランティアが継続的にアプローチすることが最良であるが，今回は諸事情から実現できなかった．

そうした中で，ボッチャの技術を向上させるなかで自己への信頼を高めていった人，ダンスプログラムの中で人とのふれあい，音楽に合わせての体の動きを体験し，情緒面での展開を見せた人がいた．非常に小さな一歩であるが，今回のプログラムを通じての収穫といえよう．

その一方で先にも書いたが，プログラムにかかわることがほとんどできず，ただ時空間を共有しているだけという人もおり，今後のプログラム提供時の課題といえる．

4．結果および考察 2－施設利用者および職員に対して，スポーツ，レクリエーション，健康に関する知識を提供し，プログラム終了後も継続的にスポーツ・レクリエーションを実施できるようにするための方法を明らかにすることに関して

1）職員に関して

職員に対する事前調査（回答者 8 名）からみた職員の属性は表 5 に示すとおりである．平均年齢は 36.6 歳，施設での経験年数は平均約 9 年であった．学生時代に福祉学を専門としていた職員が半数，残りは福祉学以外を専門としていた．

運動やレクリエーションの指導が得意，運動やレクリエーション指導の経験が豊富とこたえた職員はそれぞれ 1 名で，ほとんどの職員は運動やレクリエーション指導に関する経験，知識等はあまりないと感じている．障害者スポーツやレクリエーションワーカーなどの資格に対する認知度は高いものの，実際にそうした資格を持つ職員は少なく，スポーツ関連の資格を有するもの二人の内容は，いずれもソフトボールの 3 級審判員資格であった．

今回のプログラムを受け入れるにあたって不安に思う点，問題となる点としては「場所が狭い」のではないかという指摘，「多様な障害を持つ利用者に対してそれぞれに適したプログラムが提供されるかどうか」，「利用者にいかに主体的に参加させるか」という点があげられた．

また，今回のプログラムに提供事業に対する期待として，「終了後も施設にスポーツ，レクリエーションに施設全体で取り組めるようになること」，「利用者が楽しめること」，「リハビリテーション効果」等があげられた．

施設にプログラムを根付かせるためには「職員自身もプログラムを楽しむ」，「プログラムの内容の理解」，「職員が指導技術を習得すること」，「施設で実施可能なシステムづくり」が指摘された．

表 5．施設職員の属性

	性別	年齢	施設での経験	学生時代の専門	運動指導得意	運動指導経験	運動知識	資格の認識	資格の有無	運動講習会
ア	男	40	18 年	福　祉	×	×	×	○	×	×
イ	男	46	2 年	－	－	×	－	○	○	○
ウ	男	48	25 年	心理学	○	○	○	○	○	○
エ	男	31	8 年	商　学	×	×	×	×	×	×
オ	女	27	4 年	福　祉	－	×	×	○	×	×
カ	男	37	13 年	福　祉	×	×	×	×	×	×
キ	女	40	2 年	教　育	－	×	×	×	×	×
ク	女	24	1 年	福　祉	－	×	×	○	×	×

表 6．職員に対する事後調査結果

	年齢	関心喚起	指導方法の理解	プログラムの採用希望	ボッチャは根付くか	ダンスは根付くか	いい影響	悪い影響
ア	41	○	－	○	△日課に入れれば	△日課に入れれば	あり	あり
イ	47	○	○	○	○	○	あり	なし
エ	32	×	×	○	○	×	あり	あり
カ	37	○	○	○	○	×	あり	なし
キ	41	○	○	○	△場所と機会の確保	×	あり	なし

職員に対する事後調査（回答者 5 名）の結果は次（表 6）のようであった．

回答してくれた職員 5 人中 4 人は今回のプログラムの実施によって，運動，スポーツ，レクリエーションに関心を持ったと答えている．また，プログラムに参加して，また自らボッチャやダンスの指導をすることを通じて，運動の指導方法を理解できたと回答した職員が 3 名いた．そして，5 人全員が今後，運動，スポーツ，レクリエーションプログラムを施設の行事や日課の中に取り入れていきたいとしている．

しかしながら，プログラム提供事業終了後そのままボッチャやダンスといった種目が施設に根付くと考えているわけではない．運動，スポーツ，レクリエーションプログラムを施設で実施できる人員配置，時間および場所の確保が必要で，例えばこうした運動のための時間を日課に組みこんでいかなくては根をおろさないと考えている．

特に，ダンスは根付くのが難しいと考えている職員が多かった．その理由として，利用者の障害の内容や程度が多様であり，全利用者に同じようにダンスを指導することに困難があったこと，プログラムの中で行なわれたダンスにテンポの速い音楽のもの，動きが速いダンスがあり，十分な技術習得ができない利用者が多く見られたこと，ダンスという種目に心理的にコミットメントできない利用者がいることがあげられていた．施設利用者の状況と，種目選択，プログラム内容の選択は十分吟味されなくてはならない課題である．

同様のことはボッチャに関しても言える．当初の目的としては施設内にクラブを立ち上げ，プログラム提供後もボッチャが自立的に行なわれることを目指していたが，今回のプログラム提供事業ではその目的は達成できなかった．理由としては，30 人規模の施設でしかも障害の内容，程度が多種多様であることから，施設全体の取り組みとして 1 種目を取り上げ実施していくことが困難であることがあげられる．

ただ，プログラム終了後も数回施設でボッチャが行なわれており，希望する利用者数人は地域のボッチャクラブ（2001 年 4 月に立ち上がる予定）に参加し，職員もサポートすることになっている．今回のような事業が契機となり，継続的な運動プログラムの自立的実施に結びつく可能性があることが示唆されている．施設内にクラブを立ち上げるためには施設の環境整備，職員へのさらなるアプローチ（指導方法の教授，ルールや審判技術の習得，技術・戦術の理解等），施設外資源の紹介等をより積極的に行なう必要があることが明らかになった．

2）運動・スポーツ・レクリエーションプログラム提供事業全般から明らかになった課題

今回のプログラム提供事業は次のような手順で行なわれた．

① プログラムを提供する障害者施設の選定
② 施設職員との面接
③ 提供するプログラムの種目の決定
④ 指導者の派遣を要請
⑤ 指導者ミーティング
⑥ ボランティア派遣の要請
⑦ ボランティアミーティング
⑧ 利用者および施設職員に対する事前調査
⑨ プログラム前期 11 回
⑩ 中間評価
⑪ プログラム提供後期 11 回
⑫ 事後調査
⑬ 総括

こうした手順で事業を進める中でいくつかの課題が明らかになった．それらの課題はつぎのようなものである．

① 施設利用者の障害の多様性に起因するプログラム展開の困難
② 場所の狭さ
③ 施設利用者の名前と顔の一致に時間を要する
④ 施設職員とプログラム指導者の連携の弱さ
⑤ ボランティアの経験・知識不足
⑥ ボランティア相互の連携の弱さ
⑦ 参加者に固定したボランティアがつけない
⑧ 参加者全体で取り組む目標が明確でなく指導がマンネリ化する
⑨ 施設職員に対する指導方法，ルール，あるいは健康に関する知識供与の場，時間が取れない
⑩ クラブ立ち上げへの意図的な働きかけが弱い
⑪ 施設外の資源の有効利用がなされていない
⑫ 気乗りがしないのに参加させられている施設利用者が存在した（職員配置等の関係から）
⑬ 利用者にプログラムの全体的見通しが伝えられていなかった
⑭ プログラム提供事業に対する利用者の評価が行なわれなかった

3）プログラム提供事業のパッケージ化に向けて

今回のプログラム提供事業では先述のような課題が明らかになった．そこで，ここではこうし

た障害者施設への運動・スポーツ・レクリエーションプログラム提供事業のパッケージ化に向けて，その改善点を示し，プログラム提供の手順，内容を明らかにしたい．

① プログラムを提供する障害者施設の選定
- 施設の規模，日課，利用者の障害状況の把握
- 運動，スポーツ，レクリエーションに対する職員の経験等の把握

② 施設職員との面接
- プログラムの趣旨の理解
- プログラム遂行，クラブ立ち上げへ向けて，職員の協力体制の確認
- 年間目標・日程の確認
- 参加者は原則希望者とし，定員数を伝える
- プログラム担当職員（窓口）の決定

③ 提供するプログラムの種目・提供方法の大枠の決定
- 施設利用者の障害の状況を十分考慮し，施設利用者の希望，ボランティア等人的条件，施設・用具条件を十分勘案したのちに決定．場合によっては対象別のプログラムを考える
- 施設職員を対象とした講習会を設定する

④ 指導者の派遣を要請（大学､地域種目協会､県障害者スポーツ指導者協議会等)
- 交通費・謝金の調整
- 種目，地域性，経験等から適切な人材の紹介を受ける

⑤ 指導者ミーティング（内容・日程の決定)
- 事業の趣旨目的の理解（特に最終的に施設職員が指導できるようにすることが重要な目的の一つであることを理解してもらう)
- 施設利用者の状況（名前と顔，障害状況）の伝達
- 種目の実施計画（年間・各回）の決定
- イベント等の配置，計画（プログラムのマンネリ化を防ぐためにも)

⑥ 施設利用者に対するプログラム実施についてのファーストアナウンスメント
- プログラムの概要を伝える
- 説明会への参加を促す

⑦ 施設における説明会の実施
- プログラム提供の目的，方法，内容等を伝え，プログラム参加希望者を募る
- 参加者の疑問・質問に答える

⑧ ボランティア派遣の要請（大学､地域ボランティアグループ，県障害者スポーツ指導者協議会等)
- 可能な限り継続参加が可能な人を優先する
- 謝金・交通費の調整

⑨ ボランティアミーティング

・目的，日程，内容，役割分担の確認
・ボランティアを行なう上での諸注意
・ボランティア相互間の人的つながりを作るよう試みる（プログラム期間中を通して）
・指導者とボランティアのコミュニケーションの取り方に配慮する
・施設利用者の状況（名前と顔，障害状況）の伝達
・ボランティア交流.情報交換会の企画

⑩　事前調査の内容を施設側と確認する
・利用者に対する意識調査（運動・身体・心理・社会的側面等）
・施設職員に対する調査

⑪　利用者および施設職員に対する事前調査
・利用者のアセスメント
・利用者の個人的目標の設定
・職員の意識
・事業の目的の再確認

⑫　プログラム前期
・施設利用者の状況に応じて内容を調整する
・前期の目的は種目の技術，ルール，戦術等の理解と習得
・リーダーになれそうな人のみきわめ声かけ
・施設職員に指導方法，ルール等の情報提供

⑬　施設職員対象の運動・スポーツ・レクリエーション講習会（プログラム期間中適宜行なう）

⑭　ボランティア情報交換交流会（プログラム期間中適宜行なう）

⑮　中間評価
・プログラム参加者による評価
・プログラムの目的の再確認
・施設利用者の個人目標の修正
・プログラム展開上の問題点の析出と改善方法

⑯　プログラム提供後期
・クラブの立ち上げ，自立的なプログラム展開ができるようにすることが後半の主たる目的
・リーダーの養成（施設職員と協力体制必要）
・施設利用者の状況に応じて内容を調整する
・施設外の資源（障害者スポーツセンター，種目協会，体育館，資金の調達，指導者，大会，情報源等）の利用の橋渡し

⑰　各種イベントの実施や大会への参加

⑱　事後調査
・利用者の QOL

・職員の意識

⑲　総　括

・プログラム参加者によるプログラム提供事業に対する評価

・プログラムの効果の評価（施設利用者に対して）

・プログラムの定着に関する評価

・課題と改善点の確認

・会計報告

5. おわりに

今回の障害者施設に対する運動・スポーツ・レクリエーションプログラム提供に関する研究の結果次のことが明らかになった．

1)　身体障害のみある人の場合，今回のプログラムによって，運動に対する志向性，自己の社会的側面に特に好影響があったといえる．しかしながら，身体的側面に関しては自己の身体認識が低かったこと，プログラム期間中の体調不良などが影響して評価は低かった．また今回のプログラムのみで，身体面に対する影響を図ろうとすることには無理があり，より継続的な運動等が重要であるといえる．

2)　知的障害のある人の場合，今回のプログラムでは身体障害のある人と同じ内容であったため，参加すること自体に困難が見られる場合が多かった．当初の予定では両者を分けて行なう予定だったが，施設側からの希望もあり，同時展開となった．個々の状況に合わせて同じボランティアが継続的にアプローチすることが最良であるが，今回は諸事情から実現できなかった．そうした中で，ボッチャの技術を向上させるなかで自己への信頼を高めていった人，ダンスプログラムの中で人とのふれあい，音楽に合わせての体の動きを体験し，情緒面での展開を見せた人がいた．非常に小さな１歩であるが，今回のプログラムを通じての収穫といえよう．その一方でプログラムにかかわることがほとんどできず，ただ時空間を共有しているだけという人もおり，今後のプログラム提供時の課題といえる．

3)　今回の事業を通して，施設職員は運動・スポーツ・レクリエーション活動に関心を持ち，今後の施設生活の中にこうした内容をとり入れていこうとする態度がみられた．一方で，プログラム提供事業で行なった種目がそのまま施設に根付くとは考えておらず，そのためには，人的体制を整え，時間と場所の設定し，日課の中に意図的に採り入れていく必要があると認識していることがわかった．

4)　プログラム提供事業のパッケージ化に向けては施設利用者の状況にマッチしたプログラム内容，方法を考えること，クラブ立ち上げにむけた意図的な働きかけ，施設職員との十分なコミュニケーション，指導者間，ボランティア間のチームワークの形成，施設外資源の紹介と利用といった点に配慮しつつプログラム展開する必要があることが明らかになった．

今回の事業を終え，指導者，施設職員，施設利用者，ボランティア等この事業にかかわるすべての人が一つの事業を展開していく主体的参加者であるという認識を持つことの重要性が再認識された．こうした意識を関係者全員に持ってもらい，十分なコミュニケーションのもと展開していくことが事業の成功の鍵となる．今回その意味では十分な成果を収められなかったのはコーディネーター役の著者の力不足によるものである．今後の事業に生かしていきたい．

最後に，事業にご協力いただいた施設職員，施設利用者，指導者，ボランティアの皆様にこの場を借りて謝意を表したい．

なお，この研究は財団法人富士記念財団の研究助成（1999 年 11 月～2001 年 3 月）を受けて行なわれた．

参考文献

⑴　井上俊，亀山佳明編『スポーツ文化を学ぶ人のために』世界思想社，1999 年
⑵　藤田紀昭「障害者スポーツセンターの実態と課題に関する研究」日本福祉大学研究紀要第 100 号第 1 分冊福祉領域 1 頁～43 頁，1999.3.31
⑶　黒須充，高橋豪仁，藤田紀昭「第 31 回全国身体障害者スポーツ大会調査報告書」1996 年
⑷　藤田紀昭「障害者スポーツの展開と展望」障害者問題研究 27 巻 4 号 55 頁～58 頁，2000.2.25.
⑸　藤田紀昭「障害者と地域スポーツ――地域スポーツ振興と統合をめぐって――」体育の科学.Vol.50-3 213 頁-217 頁，2000.3.1.